



学術の周辺にて：錢鍾書の神話を解体する
中国 蔣寅著

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011245

学術の周辺にて — 錢鍾書の神話を解体する

中国 蔣 寅 著
日本 大平 桂一 訳

錢鍾書は今まさに神話になりつつある。すでに神話になってしまった、という人もいる。彼の『困城』は知らぬ人としてなく、彼の逸話はマスメディアによって細大もらさず報道され、「文化の崑崙山」、「国学大師」、「学術の泰斗」といったたぐいの称号が一つまた一つと彼に向かって飛んでくる有様である。その余波として、陳石遺の一晚の談話を彼が記録した、たった四十数頁の『石語』でさえ、1冊10円で売り出された！神話のオーラに包まれていなければ、いったいどんな深い思想、言説にこんな高価な値段がつくのだろうか？さらに「錢学」も巨大なうねりとなり、一つの波が鎮まればまた別の波が起こるといった次第、『錢鍾書研究』が矛を収めたと思ったら、また新たな出版物の企画があると聞いている（訳者注：1996年創刊の『錢鍾書評論』を指す）。沸騰する「錢学」のこのような雰囲気と、錢鍾書自身の黙々と読書し学問する日常生活とは極端にかけはなれている。我々の社会においては、どのような専門分野でもマスコミの注目を浴びなければ不公平感が生まれるため、この知識人の世界でも学者に脚光を当てる必要があるのだろうか？そうとでも考えなければ、錢鍾書の学術がこんなに話題となる理由を理解できないのだ。

1990年、錢先生80歳のお祝いの際、『文学遺産』第4期は、私の「『談芸録』の啓示」という一文を掲載した。当時私は「六・四事件」徹底審査の逆風をうけ、陝西省商洛地区で思想的鍛練に専念し、暇で他にやることがなかったため、再び『談芸録』全体をひっくり返してみ、錢鍾書の学問には、素朴ないし不器用な一面と、しゃれっ気たっぷりでスノッブな一面があると思った。当時隆盛になる一方で衰えを知らなかった「錢学」ブーム、特に多くの「錢学」者たちが、錢鍾書の研究方法論の解明に熱中している情勢に鑑み、私は彼の学者としての資質に着目して、自分の錢鍾書の

学問に対する見解を述べたのであった。私は錢鍾書の学術を三つの基本的特徴に帰納して考察した。(1) 学術に対する観念、研究態度そして研究課題選択の独立性。(2) 勤勉で集中力を伴なう文献閲読への興味、古今東西を貫く知識の構造。(3) 抜群の感性、悟性と表現能力。これらのすべては学者が具備すべき基本的な資質で、錢鍾書の学問をこれら三点に帰納してしまうのは、いささか幼稚っぽくはないかという人がいるかもしれない。然り、以上の三点は確かに学者が具備すべき基本的な資質であることにまちがいはないが、これらは同時に、優秀な学者の条件でもあって、同時に兼ね備えるのは容易ではない。よく勉強する人には、高い悟性がなく、高い悟性を備えた人は勉強する気がない。独立した品格に至っては、この二者とは必然的な関係はまったくない——一個人の人格はこれまでも知識や素質とは無関係であった。ご存じの通り、どちらも著名な学者ながら、品格は天と地の開きがあるといった事例はいくらでもある。なぜこれら三つの条件を備えてこそ優秀な学者といえるのか、御理解いただけたと思う。さもなければ、世の学者は誰もかれも錢鍾書ということになってしまう。

以上三点の認識は、私の錢鍾書の理解に基づき、彼に対する尊敬の気持ちを含んでいるのだが、私がこの文章を書いた動機は、錢鍾書の神話を解体し、彼を一人の優秀な学者としての本来の姿に還元しようとする点にある。彼の本来の姿は「錢学」者たちのあの手この手の安手の賛美と通俗化に彩られた研究によって、ますます曖昧に、ほんやりしてきている。たとえば、ある人は錢鍾書の文学研究の核心を、「同中ニ異ヲ求ム」、「異中ニ同ヲ求ム」の二点にまとめたが、私にはこれ以上に深く、本質的で、要所を押さえた観点を思いつくことはできない。「同中ニ異ヲ求ム」、「異中ニ同ヲ求ム」でない文学批評がありうるであろうか。これはなにもいわないのとおなじではないか!? 目下の「錢学」を私は次のように喩えてみた。塀を隔てて庭の風景を見るとき、錢鍾書と同じ高さの視線をもつ人は、紅白とりどりの花が目に入り、応接に暇なく、錢鍾書がどのように風景を見ているのか気にもとめない。視線の高さが錢鍾書に及ばない人は、錢鍾書には何が見えているのか、知るすべさえなからう。偉人が大きく見えるのは、我々が皆跪いて彼らを見るからだという諺がある。大師はもちろん尊

敬すべき、学ぶに値する要素をもつし、大師の著作は読まれるべきである。しかしもし自分が大師になろうと志し、彼らのような思想・学問を身にそなえようとするならば、まず最初に大師が読んだ本を読む必要がある。数年来、我々の学界に強靱な思想が欠け、偉大な業績をあげる大師が欠けているのは、学術をとりまく環境が正常でないこと以外に、我々が目の前の大師の著作を読むだけ、あるいは更に多くの場合大師について議論するだけに終わっている、そのあたりに重要な原因があるのだ。フロイトからデリダまで、もっともらしいことをいう人は多いが、これらの大師が読んだ莫大な量の書物を、彼らはいったいどれだけ読んだというのだろうか。錢鍾書の場合も一緒に、彼が読んだ本を読まずして、どうやって彼の本を理解できるのだろうか。さらに言わせてもらえば、錢鍾書を大師と言うのは似つかわしくなく、博学者と呼ぶのこそふさわしいのだ。

〔大師と博学者の区別〕

錢鍾書が大師ではない、などと言うと、多くの人は怒りだすに違いない。まあそうあわてないでほしい、その理由をこれからゆっくりとお話ししようではないか。博学はむしろ大師の基本的条件である。しかしもっと重要なのは、ある学問分野の知識の蓄積と、人類の文化への貢献である。哲学のラッセル、物理学のアインシュタイン、音楽のカラヤン、囲碁の呉清源たちはみな博学で資格十分の大師である。しかしさほど博学ではない大師だっている、たとえばニーチェ、ヴィトゲンシュタイン。つまりは博学者は必ずしも大師ではないし、博学者ではなくても大師たりうる。中国の例をあげると、たとえば清代では朱彝尊は博学であり、紀曉嵐・錢大昕もそうではあるが、我々は彼らを大師と言うことはできない。一方、顧炎武は必ず大師と呼ぶ。近代では、章太炎・王国維は文句なしに大師だが、同様に博学な余嘉錫・陳垣は大師には結びつかないようである。その一方で多くの人から空疎とみなされる梁啓超・胡適は、かえって大師と呼ばれてあたりまえと考えられている。明らかに、大師というのは、博学の士であるだけでなく、陳寅恪先生のいわゆる、「能く學術の区宇を開拓し、前修の未だ逮ばざる所を補う」「一時の風気を轉移し、來者に示すに軌則を以て

す」(「王静安先生遺書序」)、つまり一代の学術の気風を開拓し、学術の規範をつくりあげる人物なのであり、最も根本的には民族、人類の文化に対して究極の関心を抱こうとする人を指す。

陳寅恪は近年学界でますます重視を受けるようになってきており、我々が大師に内在する意味を理解しようとする際、特に我々を啓発してくれる。陳寅恪は無論博学者であるが、彼の学術的業績とその大師の地位は、その広い学問あるいは研究成果から生じたと言うよりは、彼が歴史学の分野で新しい気風を開拓したことから生じ、彼の中国文化に対する究極の関心から生じた、と言ったほうが当たっているだろう。具体的な業績について言えば、陳寅恪が下したいくつもの著名な論断は徐々に否定されるか止揚されるかしてきているが、彼の地位にはほとんど影響はない。それはなぜか？彼は歴史学の新しい方法論を創始し、たとえ彼が下した結論を否定する人でも、彼の方法論に沿って成功に導かれたのである。同様に、顧炎武の古韵十部説は江永・戴震から王力に至る数多くの学者たちによって乗り越えられたが、彼らの業績は顧炎武が創始した方法論によって得られたものなのである。顧炎武の「天下の興亡匹夫も責有り」といった文化に対する責任感、これこそ陳寅恪の文章に表われた学術に対する精神、文化の命運に対する関心と責任感、内心の深いところで我々をゆさぶる精神のエネルギーに他ならない。これこそ大師ではないか！博学者は知識への単純な欲求に従い、大師は天下を自分の責任の範囲と考える。古い表現を用いると、博学者の学問は自分のために、大師の学問は他人のためにするのである(訳者注：『論語』憲問篇「子曰、古之学者为己、今之学者为人」)。

もし読者が私の大師及び博学者に関する理解と区分に賛同して下さるなら、きっと錢鍾書の学は大師の学に非ず、という私の考えに同意して頂けるだろう。冷静に論ずると、錢鍾書は本来読書人で、読書を無上の楽しみと考えている。彼の著書の大部分は読書で得た知見であり、蚕が糸を吐いたり乳牛が牛乳を出したりするように、食べたものを消化して自然に生み出したものである。もしも彼の詩学が「吾が操觚の自ら運らすに資す」という習作の必要から生まれ、さらに「属詞比事の惨淡経営を体察する」という研究の欲望が彼に存在するというならば、『管錐編』の内容は読書か

ら得られた知見であり、知見を忘却の川に流すに忍びずして整理を加えたもので、その中は古えの人、西洋人と勝負を競いたいという動機に充ちあふれている。近頃ある人が錢鍾書をこう批判した、「古今国内外の様々な典籍を援用して自らの論拠としている。特に筆記スタイルの『談芸録』『管錘編』においては、自身の見解は雑多な古今の文献の中に埋没してしまっている。過度の文献の引用によって、もともと二言三言で説明できるはずの問題が複雑多端となり、読者が閲読する際の大きな障害となっている。(張蔚星「錢学を語る」『中華読書報』1996年6月19日)このような見解は、錢鍾書の学問の方法をよく理解できない人のものである。彼と錢鍾書、湯用彤の学識を較べようと試みようとする人もいるが、これはさらにつまらぬ企てである。というのも、学識というものは、同じ課題、それもきわめて難しい課題に取り組むのでなければ、通常深い浅いを測ることなどできないのだ。たとえば川をわたるとき、深ければ全身どっぷりつき、浅ければすそをからげてわたる、小川をわたるならば臨機応変に対処できるわけだから、学識の高下を誰が測れようか？錢鍾書の学問に関しては、学術の方法論から判断してこそ意味があると考え。彼はもともと特定の問題の研究には興味がなく、彼に問題研究をせよと要求しても、いささか生真面目にすぎる。最近若い世代の学者に対して「学問をもてあそんでいる」という批判がなされるが、実は彼らに学問をもてあそぶ資格などあるはずもなく、いささか手厳しい「学問を切り売りする」という表現の方があっている。「もてあそぶ」ためには、お金と暇と実力が必要だが、貧乏書生にはとても無理な話だ。錢鍾書こそ学問をもてあそぶことのできる人である。といっても私には彼をおとしめたり、敬意を払わないといった意思はない。『談芸録』は艱難辛苦の産物であり、艱難辛苦を超越し、俗塵を避ける寄り所になっている、と私は前述の文章の中ですでに説明した。錢鍾書の学術が達した境地は、ある種きわめて超然たる学問的態度に立脚しているのだ。

あの頃、特殊な人生経験の中で、私はことのほかこのような錢鍾書の超然たる態度を高く評価したため、友人たちは私の買い被りすぎで、私は本当のところ大して錢鍾書を理解してはいないなどと言った。しかし私は今

も、錢鍾書に対して下した判断はそれほど実際からかけ離れてはいないと思っている。当時と今の違いは、その後顧炎武を読み、古今の知識人の命運と選択がよく似ていると体得した点にあり、「明清交代期の知識人の命運と選択」（『中国知識人の人文精神』許民主編 河南人民出版社 1994年刊所収）と題した文章で、学風の改革が文化の改革に対して持つ意味を提議した。この問題を考えたが故に、学術の使命と大師の内在的な意味について新しい認識が得られたといってもいいだろう。

私の考えによれば、錢鍾書は実は大師とは言えず、博学な読書人といえるにとどまる。彼にとっては、読書は人生を充実させてくれる一大楽事なのであって、学問はそこから自然に出てくる結果にすぎない。そのため、彼の学問は耕作することに意義があり、その収穫は問わず、ましてや天下の作柄など気にしない、というものである。彼の学問と人柄にはある種超然とした要素があり、もし彼の人柄をその著書名「人生の周辺にて」で形容できるとすれば、彼の学問は「学問の周辺にて」と形容できる。これは個人の選択としてはまったく問題ないが、「大師」の候補者としては考えこまざるを得ない。彼の学術は純粹に自分を楽しませるためのもので、彼の著述には現代の学問に介入したいとか、新しい学問分野を開拓しようといった関心は見られない。彼の小説にはあまりにも文人氣質が横溢しており、知識人として文化を担っていこうとする気概は見られない。彼の詩はとても濃厚な江湖派の風囲気に満ちており、あまりにもあっさり作られすぎている。袁于令は言う、「聡明さは作詩の妨げになる」（『今世説』卷二）、まさにこの欠点を道破している。知識人が現実生活で負うべき道義と責任に着目すると、彼がその地位にふさわしい負担をしているとは考えられない。彼の明哲保身を評価すべきか、孤高な生活態度を横目でにらみつけるべきか、私は判断に迷う。数十年来、錢鍾書の博学と拮抗する学識を持つのは陳寅恪のみだが、どちらが大師かと問われれば、大多数の人々は後者に傾くと私は考える。錢鍾書と陳寅恪の違いは、はっきり言って趙翼と顧炎武の違いに等しい。大師の学問は知識の背後に広大な思想的背景が存在しているし、博学者の学問には知識そのものがあるだけである。大師の学問は学理が一貫していて、知識はシステマティックに整理されている。博

学者の学問は、知識が堆積しているだけで、時に美辞麗句の羅列に流れてしまう。大師の学問は新しい学問のモデルをうち立てるが、博学者の学問は旧来の学問モデルを踏襲するだけである。それぞれが目指すものは、はっきり二つに分かれるのだ。

〔錢鍾書の学問の方法論に見られる古典的色彩〕

文化に対する究極の関心が、現代中国のある種の言うべからざる特殊性の中で、個人の生活観、とりわけ生活環境に関する体験にかかわってくるとすれば、学問のモデルは、大師の備えるべき品格の中では、純粹に学問の領域で論ずることのできる問題となる。

もちろん、学問の方法論はかなりな程度まで人生の態度と不可分一体である。もし胡適の「士は天下を以て己の任と為す」という政治的情緒が、学術研究の専門性・精密性を減じたとすれば、錢鍾書の超然たる人生態度は、彼の学術活動・学問の方法論と、現代学術界・現代の学問方法論との乖離を決定づけたと言える。私はずっと錢鍾書の方法論がかなり古典的で、彼が新しく学問のモデルを創始しなかっただけでなく、日々に発展する現代の学問モデルを踏襲するのがいやですらあり、彼の学問はその人生態度と同じく、基本的には中国の伝統的な方法論にとどまっていると考えてきた。『七綴集』に収められた数篇の論文以外、二つの力作『談芸錄』『管錐編』は、どちらも顧炎武の『日知録』、錢大昕の『十駕齋養新録』、趙翼の『陔余叢稿』スタイルの学術筆記を踏襲しており、唯一の違いは、引用文献の範囲が西洋の原典に拡大した点にある。私は「『談芸錄』の啓示」の中で、次のようなあまりこなれない喩えを使った。『管錐編』は皿鉢料理—精選された材料の蓄積で、『談芸錄』は濃縮スープ—概括され洗練された卓見である、と述べたのである。前者は中国西洋文化の比較研究の武器庫であり、あまたある項目を拡張するだけで論文に早変わりする。後者は、古典文学研究者の知恵袋で、どの一段を選んでも大論文が仕上がってしまう。二つの著書の内容は、よく練られ、叡知と啓示にあふれているが、同時に伝統的な読書札記の著述スタイルを踏襲している。つまり材料と結論はあるが、分析と論証のプロセスだけが欠落しているというもの。この一

点で彼の著作は現代の学術モデルと決定的に異なり、かけ離れてしまっているのである。

学術筆記が学術モデルを規定するとは限らないし、筆記の作者自身とは異なっていることは認めなくてはならない。顧炎武はもちろん『日知録』で有名だが、彼には他にも『天下郡国利病書』『肇域志』『音学五書』があり、歴史地理学のフィールドワーク、音韻学研究の帰納・実証による研究モデルを創始した。『日知録』にしてからが、彼が創始した研究モデルを具現した著作で、中国の歴史文化に対する反省・再検討を行い、過去に類を見ない深みに達している。これぞ大師の作である！『十駕齋養新録』『陔余叢稿』の方は、具体的な考証を積み重ねたにすぎず、特に後者は知識の羅列に片寄っている。錢鍾書が時に銜学に傾く場合、彼らによく似てくる。顧炎武や王国維の時代には、このタイプの学問は正常だったが、今日もってくると、とうてい我々は満足できない。というのも、現代の学術モデルは、結論よりは結論を得るための分析プロセスを重視する。我々のだれもが経験することだが、結論の多くは靈感・直感だけから得られる。ところが得られた結論を論証していくのはきわめて難しい。唐詩研究者ならきっとおわかりいただけるだろう、千字の紙幅で唐詩を論ぜよと言われたら、修正を加えることなくあっという間に書き上がる。これが1万字ともなるとかなり考えこまねばならなくなる。20万字である問題を論ずるとなると、軽々には筆が下せなくなる。実証・分析プロセスの精密化は、現代人文科学研究の方法論において最も強く要求されているものである。この点に留意しながら、洗練をきわめた『談芸錄』『管錘編』を鑑賞する時、我々はこのような学問の形態と著述の形式が巧妙に選ばれていることに気付く。彼は材料を羅列し、結論を開陳するものの、最も困難な分析・論証のプロセスを省略する。客観的に言って、「難きを避け易きに就く」といった気味がある。我々が一本の論文を書くために、あれこれ頭をしぼり、数日あるいは数十日も費やす時、錢鍾書はたらふく本を読む。彼はたしかに我々が論文を書く時間を使って本を読んでしまう。もし彼が我々と同じように論文を書いたなら、絶対にあんなに多くの本を読めないだろうし、『錢鍾書論学集』のような七巻の大冊を出せなかったであろう。

これまで錢鍾書について出任せを言ってきたが、読者の皆さんは同意されないかもしれない。まあそれはそれでよろしい、私が言いたかったのは、錢鍾書の学問は非常に個人化されたもので、彼の業績は主に知識の蓄積で、研究方法・学術モデルについては何の創造もなく、何の関心もない、これに尽きる。このような学者、その著作に対し、私たちは敬意を払いつつ読み、知識として受け入れるだけであり、もしもまことしやかに、読書を愛する天性の発露を、現代的意味を持つ学術研究とみなしたり、純粋な知識の蓄積を一つの学問分野とみなして研究したり、崇拜したりするならば、恐竜の卵を超伝導の材料として研究するようなもので、専門家に笑われるだけでなく、錢鍾書本人にもバカにされよう。

(原注：もともと『南方都市報』1996年1月11日号の文章に修正を加えたものである。)